

2015年度 校内研職員アンケート結果

1. 研究主題・副主題について

確かな学力を身につけ、意欲的に学ぶ子どもの育成

～本校児童に身につけさせたい力の定着へ向けて（2年次；国語科「書くこと」を軸に）～

- よかった・適切であった。（多数）
- 「書くこと」への意欲を向上させるよい機会であったので、よかった。
- 児童の実態に合わせた課題であり、適切であったと思います。
- 一年次より、国語にまとをしぼったことにより、ブロック学年内でのつながり、系統立てた実践計画が深まった気がする。

肯定的な意見が全てであった。確かな学力を身につけること、意欲的に学ぶ子どもの育成をはかること、国語を軸に据えたことは、本校校内研究として喫緊の課題であったといえる。

2. 研究目標・研究仮説について

研究目標 国語科において、「書く力」を高める授業作りをするために、児童が意欲的に学習していく指導のあり方を明らかにする。

研究仮説 国語科において、本校児童に身につけさせたい力に対する有効性が期待できる手立てを発掘・開発あるいは改良し、それらを「書くこと」に関する指導課程に位置付け、授業を行うことで、児童の「書く力」は向上し、意欲的に学ぶようになるであろう。

- よかった、適切な目標と仮説であった（多数）
- 研究目標に沿って1年間、「書く」ことについて学年で共通意識を持って授業に取り組むことができた。具体的な目標と仮説だったのでよかった。
- 授業での取り組みだけではなく、日常の取り組みや家庭学習への取り組みを入れることが目標により近づけたのではないかと感じました。
- 日常的に行える活動を取り入れることにより、書くことへの抵抗が減り、楽しむことができるようになった。表現技法など、引き続き覚えていけば書く力は向上していくと考えられる。
- ブロックごとに、力をつける手立てを発掘・開発し、授業を行うことで「書く力」の向上が、独自に工夫するより効果的なものが考えられたと思う。3人寄れば文殊の知恵であり、仮説は確かであったと思う。

肯定的な意見が全てであった。「意欲的に学習していく指導のあり方を明らかにする」という研究の目標は、職員の共通理解としてしっかりと根付いていたようである。仮説も適切であるという意見だった。

3. 研究内容・研究方法について

1. 「書くこと」の学習過程に沿った指導方法（手立て）を各学年（各ブロック毎）で考える。
2. 「書くこと」に役立つ日常的に行える学習活動の考案
3. 児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら児童の学習習慣を確立するための方策の考案

【研究方法について】

- よかった・適切であった。（多数）
- 指導主事を招聘し、学習会を行ったことで、研究の見通しが持てるようになったので良かった。特に単元を貫く言語活動について理解が深まった。
 - ・児童に身につけさせたい「書くこと」の能力を明確にすることの具体化については、ようやく見え始めたので、今後書くこと的能力系統表の作成を今後の課題としたい。
- 講師を招聘して学習会や研究授業の指導・助言をしてもらえたので、よい勉強になり今後の実践に生かせることができた。
- △適当であったと思うが、本校全体のビジョン（計画？）を考えて行く必要もあると思う。

【研究内容1について】（研究の成果に理由多数）

- 「書くこと」のポイントや手順を細やかに説明し、段階を追って授業を進めていくことで子どもたちの書く意欲の向上やスムーズな活動へと繋がった。
- 「書くこと」の学習過程に沿った指導方法（手立て）を各学年で考えることについては、統一した取り組みができたのでよかった。
- 国語科の「書くこと」について焦点化し研究を進めてきたことは、下の学年が今後同じ単元の授業を行う上で、効果的な授業方法を財産として残せたことが大きい。今回の授業研を行った学年はきちんと資料を残すことを意識していくべきであると思う。また、今回授業研を行っていない学年の「書くこと」の単元についても、何らかの形で単元を貫く言語活動や、実践方法を残せるようにしていくと、さらに玉諸小の「書くこと」は伸びていくと思う。

【研究内容2について】

- （日常実践について）子どもたちの実態を明らかにし、さまざまな手立てを各ブロックで協議・検討した上で、実際に授業を支える取り組みとして実行したことは、効果的だった。
- 「書くこと」に焦点化して、日常的に実践に生かせる研究となりよかった。
- 指導方法だけでなく、日常的に行える学習活動も取り組んだことはとてもよかったと思う。
- 日常的に行える学習活動を行ったことで、子どもたちの力がついてきた。3
- 日常的に行える学習活動に取り組んだことによって、基礎基本の定着も図れた。
- 日常的に行える学習活動に取り組んだことで、基礎基本の定着も図れたと思う。
- 日常的に行える学習活動の考案については、朝の会のスピーチを生かして、コツコツ取り組むことができたのでよかった。

○手立てや日常的な活動が、学年ごとに工夫されていてよかったと思う。

【研究内容3について】

○学習習慣の取り組みは、他校でも課題となっているようである。手引きをどのように活用していくかが課題となるが、はじめていくことが重要である。

○家庭との関係を図るといふ取り組みは、継続していくことで定着がはかれると思う。
7

○面倒な取り組みだと思ったが、保護者が自分の子どもの学習に対して意識するだけで、学習の習慣化が図れたり、忘れ物が減るきっかけになったりと、大きな効果があることがわかった。「家庭の問題だから…」と手つかずにしていい問題ではないこともわかった。

○家庭との関係について、実践を通し、保護者からは継続してほしいという声が多数あった。実際に、取組表はあった月の自学の量は増えていた。チェックをしてくれない家庭も少なからずあるが、呼びかけていきたい。

・家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣を確立するための方策の考案について、家庭学習の取り組みを全校でしたことは、とてもよかった。しかし家庭での意識に温度差があるのを非常に感じた。今後の更なる工夫を考案する必要性を感じる。

○上記3つがそれぞれ実践されていた。

○内容・方法ともに具体的に取組めるような内容だったので良かった。4

研究内容・方法とも概ね肯定的な意見であった。来年度も「国語科の書くこと」について継続していくならば、児童に身につけさせたい「書くこと」については、ようやく具体的な方法が見え始めたので、今後書くこと的能力系統表の作成を課題とすると良い。また家庭との連携については、全て学校が行う問題ではないが、手をかけた分だけ伸びるので、甲府市の小学校全体の「確かな学力」が落ち込んでいる今、学校としても「どうやったら学習の習慣がつくのか」ということについては今後も研究していく必要がある。

4. 研究計画について

○よかった。適切だった。13

○実践が一時期に集中しなくてよかった。全員で授業を見ることができてよかった。
3

○ブロックで一本の授業は、低中高の学習を系統的に見ることができてよかった。

・研究授業サポート学年としては、余裕をもって取り組めたが、授業学年はどうだったでしょうか？

△研究授業日の設定を修正すべきであったと反省しています。11月中に研究授業が終了する予定のほうに望ましかったように感じた。12月の授業は授業者に負担になってしまったと思われる。

△2学期が始まってしまうといそがしくなってしまうので、夏休み中に指導案の骨子ができあがっているほうがよい。

△研究授業の日程をもう少し早めに決めた方が計画的に取り組めたと思う。5

- △ 研究授業をする授業が後半に集中し、日程的に大変だった。 3
- △ 5年生は同じ時期に3つの研究授業が重なってしまったので、少し大変でした。
- △ 自分が上手く計画的にできなかったことが要因でしたが、来年度同じ時期に行うと考えた場合、12月の研究授業をもう少し前にできると楽だと思います。
- △ 12月の研究授業は、非常に大変であったので、計画に無理があったように感じた。もし来年度も3本研究授業をするのであれば、計画的に11月中に終わるようにするとよいと思う。

研究計画については適切だったという意見と、研究授業を12月まで行うのは忙しいという意見が半々くらいであった。日程の問題は、授業研に指導主事を招聘する際、指導主事の都合にも左右されるので、11月の早いうちだけは流動的にし、それ以外は日を固定し、都合が合わないなら無理に招聘しないということにしても良いのではないかと。今年度は3本授業を行い、全てに指導者を招聘したが、基礎研究の時に招聘することは外せないが、全てに呼ばなくても良いかも知れない。特に2学期はどこの学校でも研究授業が立て込むので、本校に3回とも指導主事が来てくださるということは機会均等の観点からも厳しいと思う。

また研究授業の順番は、9月中に決めておいても良かった。研究授業の日までを逆算しやすく、余裕が持てたと思う。しかし8月・9月で指導案づくりの機会があったので、そこである程度の方向性が話し合われているようできたはずであるので、夏休み中に運動会の計画や、研究授業の計画はある程度意識して進め、計画的に進めることは必要であると思う。

5. 研究組織について

よかった適当であったと思う（多数）

- それぞれの部会ごとに成果が上がり、良かった。
- 他の部会でやっていることの内容が全ての職員に情報が行き渡るので、良いと思います。 4
- それぞれ役割を持って研究にあたっており、適切であったと思います 7
- 3つの分野に分かれての研究活動で良かったと思います。
- 職員数と所属人数を考慮すると適切であると思う。
 - ・研究組織が3部あることは、細かく研究できてよいとは思いますが、調査研究部の生活習慣や学力テストなどの考察を十分に生かしているかについては、やや曖昧だと感じた。研究組織のグループ分け・人数や内容などもう少し考えてもよいのかと感じた。
- △ 1～3年生と4～6年生の2つのブロックでも良かったのではないかと思います。（研究授業の回数削減の観点からの意見だと思われる）
- △ 調査研究部会と学習環境部の先生は学年の先生が長をやっていたが、授業研究部会にも関わるので、学担以外の先生に担当していただくと良いのではないのでしょうか。 3

組織的には良かったという意見が多かったが、研究計画の反省にもあったが、研究授業の回数削減の観点から授業研究部を3ブロックではなく、2つにするという意見があった。来年度の検討事項として残したい。また同様に、調査研究会と学習環境部の長の件も、校内研が来年度継続研究で、3部会制を維持していくなれば検討事項としたい。

6. 研究の成果について

- ・さまざまな取り組みを通して「書くこと」の活動が増え、確かな学力の向上に繋がったと思います。
- ・書くことを重点的に指導してきたので、主述が整った文章、理由を入れた文章、はじめ・中・おわりを意識した文章を書くことができるようになってきている。4
- ・書く活動に対して児童の抵抗が少なくなり、たくさんの量が書けるようになった。一番の成果だと思う。7
- ・「書く」ことについて、学年で考えて取り組んだことで、個人差はあるが意欲的に書く活動に取り組む児童が増えた。
- ・書くことについての授業構成について、深く研究しさまざまな方策を蓄積できたことが成果であると感じる。
- ・授業実践を行うことで、子どもたちに書く機会を多く与えられたので、書くことへの抵抗が少なくなった。3
- ・全校で「書くこと」に取り組めたことは有意義であった。教師側も児童も意識が上がり、それぞれの学級で実践を積み重ねる事が、子どもたち一人ひとりの「書く」意識を育て、「書くこと」にも慣れていくのだと思う。
- ・単元を貫く言語活動という国語科の重点を改めて見直しながら、研究を進められたことが大きな成果であった。
- ・研究授業で「成果物」についての重要性が分かり、これからの指導に活かしていきたいと感じました。4
- ・成果物を明確に設けることによって、子どもたちの意欲向上に加え、学習内容も明確になり、単元を通して成果物を用いることの重要性が明らかになったと思う。3
- ・取材した事柄を構成・文章化する活動を通して、「何のために」取材するのか、資料を読み取り、考察するのかなどの目的意識を明確にすることで、情報を取捨選択することができる児童が増えた。また、教科書の「資料をどのように引用するかの手順」や文章化する際のキーワードを押さえた「表現キーワード一覧」は、記述する際に大きな役割を果たし、文章を書くことが苦手な児童も一生懸命書く姿見られた。
- ・キーワード一覧表や構成シートなど財産となる物ができた。今後の指導にも取り入れていきたい。
- ・授業研では、発達段階に応じた（またはそれ以上の）実践を参観することができた。

また学習習慣の確立のための指針（具体物）を作成することができた。

- ・ 日常の取り組みを充実することができた。この取り組みを継続していくことが大切だと思う。ワークシートなどが次年度も活用できるとよい。 3
- ・ 日常的に取り組んだ復習プリントやスピーチメモがたいへん有効だった。来年度も継続して取り組めたらよい。
- ・ 週末作文やスピーチ等の日々の活動を行うことで子どもたちに書く力がついたように感じる。 3
- ・ 子どもたちにあった日常的な取り組みや、学習習慣の確立を行なったことで、全クラスが書くことへの意欲や意識が高まったのではないかと思います。
- ・ 日常的な活動に取り組んだことで児童が書くことになれ、書く内容が豊かになったと感じます。中学年ブロックで取り組んだ道筋を 4 年生でも生かし、仕事リーフレットの作成を行ったが、取材メモから構成メモに変身させるところなどブロックで研究した成果が出ていたと思います。

さまざまな取り組みを通して「書くこと」の活動が増え、確かな学力の向上に繋がったこと。「書く」ことについて、各ブロック毎に工夫を凝らして取り組みを考えたことで、意欲的に取り組む児童が増えたこと。成果物を明確に設けることによって、子どもたちの意欲向上に加え、学習内容も明確になり、単元を貫く言語活動を考えていくことの重要性が明らかになったこと。日常的な取り組みを平行して行うことで、「書くこと」に関する技術の向上、意欲の高まりがあったことなどが主な成果としてあげられた。

7. 本年度の研究の課題について

- ・ 書くことを苦手とする児童に対しての取り組みについてどんな手立てをしてきたか、各学年の情報交換をもう少し多くとって、日々の実践に生かしたい。
- ・ 3ブロックの取り組みを共有することが難しい。 3
- ・ 書くことに関することを、学校として統一した指導について、学年の系統性を踏まえながら児童に提示していくこと。 5
- ・ 書くことに関するアンケートは、実施の規模を統一しておくこと、学年や学校全体という単位で変化が分かり、良いと思います。 7
- ・ どの学年も工夫した「必殺技」を用いて授業を行い、児童の学習意欲を高めることに寄与したと思うが、一過性にせず、継続的に行い、改良を加え、深めていくことが必要だと思う。（同じ必殺技でも来年度の児童にはどれだけ有効なのか、児童の実態を加味して今年度の取り組みをどのように生かしていけるのかなどを研究する？）

大きな課題としては、各ブロック・各学年毎の情報交換の薄さが問題点としてあがった。また学年の系統性を考えていくこと必要があるという意見が多かった。今年度は「書くこと」の学習過程に沿った指導方法（手立て）を各ブロックで考えること。「書くこと」に役立つ日常的に行える学習活動の考案することがメインであったので、今年度明らかになったことや、指導主事から教えていただいた「書くこと」についてのスキル系統表をもとに、本校独自の「書くこと的能力系統表」を作成していくのも来年度継続研究をしていくなら必要であろう。

8. 来年度の研究の方向性について

3年計画の2年目が終了。あと1年は何をすべきか？
国語の継続なら来年度も「書くこと」か？それとも他の領域か？ 教科を変えるなら何のどんな領域か？

【国語科の「書くこと」について継続研究】（大多数）

- ・書くことの継続研究が良いと思う。
（上記賛成の中で、具体的な研究内容に関わっての意見）
- ・書いた物に対しての教師のチェック体制（丸付け・コメント・指導・評価等）について研究できたらいいと思います。4
- ・国語「書くこと」において（朝学などにおいて）日常的に行える学年系統性をふまえた内容を確認する。（各学年で押さえる事項や内容など）

【国語科の「書くこと」は区切りにして、算数科に変えるという意見】（3）

- ・書くことの継続も良いが、学習状況調査の算数（特に B）に課題が多いことから、そのことへの取り組みも全校として取り組みたい。
- ・書くことについての日常的な取り組みは続けつつ、朝学などで算数、文章による表現問題に取り組んでいるので、来年度は算数における書くを深めていってもよいのではないか。
- ・算数：今年度の全国学力調査から山梨県は算数 B の成績がよくなかったという実態をふまえ、算数に力を入れたらどうかと思った。文章題の読み取り、数直線、図など、読み取って書くことが今まで研究してきた国語力にもつながるのではないか。

今年度の段階では、圧倒的に継続研究が多かったので、申し送りたい。しかし、甲府市が確かな学力向上に向けて、まずは「算数科」を軸に授業改善を図ろうとしているのもあるので、この結果を踏まえた上で、来年度初めに全職員でもう一度確認して行けば良いと思う。

9. その他

- ・授業後の研究会で、多くの方が発言でき、意欲的に研究に参加する姿勢が良かった。
- ・ワークショップ形式の研究会は、そろそろ・・・。従来通りの授業研究会を行い、助言者の先生からの授業分析及びお話を伺いたい。
- ・指導案検討も重要であるが、2学期 11 月中に授業を入れるとなると、指導案検討→

授業研究というサイクルを変えることを検討してはどうか。

- 研究内容の継続を図るのであれば、各学年で授業を提案することも可能ではないか。全体での授業研・人数を調整しての授業研・指導助言者の招聘の有無などもち方を工夫することも可能。教員数も増えてきているので、学年ベースで研究するのも一つの方法かもしれない。